
望月時のバンパイア

落書き師匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望月時のバンパイア

【Nコード】

N8237T

【作者名】

落書き師匠

【あらすじ】

とある少女、望月^{もちつきみか}美花はバンパイアだった。だが、人間に殺されると思い、街中に捨てられた。一人になった美花の元に、同じくバンパイアの我成^{われなりらいあ}雷亜が現れた。

これは…、雷亜と美花のバンパイアストーリー

序章

とある街中、少女は一人丸くなっていた。

「さん…、…嬢さん」

遠くから聞こえる謎の声。恐る恐る、目を開く。

「大丈夫かい？」青い髪の毛が目を隠し、赤いコートを着て、白っぽいズボンをはいていた。黒いブーツもそろえていた男性が、少女を見ていた。「死んでいるかと思ったよ」

「人を勝手に死なせて面白い？」

少女はその場を立ち去ろうとしたが、先程くじいた右足首に痛みが走った。

「その怪我じゃあ歩けないよ。おぶってあげるよ。」

そう言って、どこかへ連れて行った。

一 身だしなみ

静まり返った夜の中、森の中でたき火をしていた。

少女はココアを飲んで、安心した。次第に、今までの自分を話すようになっていった。

「私…、バンパイア。」正体を、すらつと話してしまったが、男性は何食わぬ顔でそのまま話を聞いていた。「人間に捨てられてしまったの。バンパイアと一緒にいると、殺される…。そんな理由で私を捨てたの…。」

話し終わると、男性は立ち上がり、かばんの中をのぞいた。

「バンパイアって言っても、当分人間の血を飲んでいないようだね。はい」

と、血が入ったボトルを少女に投げて渡した。それを、一気にゴクゴクと飲んだ。

「実はというと、僕もバンパイアなんだ。同じ理由で、捨てられたよ。君と僕とは話が合いそうだな」

フフッとわらうと、それにつられて笑った。

「私の名前、望月美花。一六歳で捨てられて、今は一九歳。」

「僕是我成雷亜。一二歳で捨てられ、今は二四歳。」

左手で握手をした。

雷亜は髪に気付き、美花の前髪を触った。

「髪を切っていないようだね。僕が切つてやろうか？」

「ありがとう…」

くしとはさみを出して、美花の髪を切り始めた。

「こんな感じでどうかなあ？」

鏡を見せると、美花は恐ろしいほど変わっていた。黒がかった青い髪。彼女の自慢の色。

太ももまでであった長い髪を、腰までに切り、前髪が右目を隠していたが、目の上まで切り、さわやかになった。

「わぁ…ありがとうございます。」

ここにきて何回ありがとうございますと言ったんだろう…。美花はそう思った。

「服もぼろぼろだね。店で買おうか。」

「うん。」

カラン…

とある服屋に入った。

そんな感じがよいだろう…。必死に悩んだが、女の子っぽくした。ピンクのワンピースに、黒の薄い上着。下は黒いズボンに青いブーツをそろえた。

「ありがとうございます。」

店を出ると、すぐそこに壁にもたれた雷亜がいた。

「ど、どうかなあ…？」

「似合うんじゃない？」

平凡な感想で少々気に食わなかったが、心ではすごく似合っていると聞いたかっただろう。

「そろそろ夜明けた。寝ないと死ぬぞ。」

「そうだね」

再び暗い森の中へと消えた。

二 手下として

朝。美花は、月の光とともに起きた。

「ふぁーあ…」

あくびをすると、早くもご飯の用意をする雷亜の姿があった。

「今日はよく眠れたかい？」

「もちろん。」笑顔できつぱりと答えた。「おなかいっぱいにご飯を食べたし。暖かいココアも飲んだから…」

こんな日はもう二度とないだろう。美花はそう思った。

「ほら、食べな」

差し出したのはシチューだった。

「うん。」

シチューを受け取ると、勢いよく食べ始めた。

「ところでさ…」

と雷亜が不安そうに話しかけて来た。

「なに？」

美花は聞いた。

「君、帰るところもないんでしょう？」

あ、と気がついた。そうか…。帰るところ、なかったんだ。美花は再びあの寂しさと寒さがよみがえってきた。

「ないんだね…。それじゃあ……………」とうれしそうにこっと笑った。「僕の手下にならないかな？」

手下……。うれしさか？かなしさか？自然に涙がこみ上げて来た。

「帰るところがない…そうだね…私はバンパイアとしても、人間の血の飲み方も知らないの…。貴方にすべてを教わって、立派なバンパイアになりたいわ…」

「じゃあ決まりだね！」

立ち上がると、美花に近づいた。

「今日から君は僕の弟子だ。よろしくね」

と、握手を申し出た。へへと笑うと、申し出た手を、握った。
「それじゃあ、貴方は私の師匠ですね。」

運命の齒車が…大きく変わっていくのも…美花達は…知らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8237t/>

望月時のバンパイア

2011年10月9日07時55分発行